

Hack For Japan

エンジニアだからこそできる復興への一歩

Hack
For
Japan

第54回 南相馬小高ハッカソン

● Hack For Japan スタッフ
及川 卓也 OIKAWA Takuya
Twitter @takoratta
高橋 憲一 TAKAHASHI Kenichi
Twitter @ken1_taka

2016年3月5日と6日に福島県南相馬市の小高区にて開催された帰宅支援ハッカソンについてレポートします。Hack For Japanからは及川がメンターおよび審査員として、高橋がプレイヤーとして参加しました。

開催までの経緯

小高フリーペーパー制作委員会^{注1}と会津大学OpenAppLab^{注2}の主催、南相馬市の後援で、会場は常磐線の小高駅(この付近の常磐線はまだ運行を再開していません)のすぐ近くにある双葉屋旅館にて開催されました。

南相馬市の小高区は福島第一原発から10kmから20kmの場所にあり、これまで避難指示の対象となっている地域です。近いうちに避難指示が解除される予定になっており、住民の皆さんの帰宅が始まろうとしています。今回のハッカソンはそれにあたっての課題を解決するものを作ろうという意図で企画されました。地元の皆さんに加えて、同じ福島県の会津若松、宮城県の石巻、そして東京などから30名ほどの参加者が集まりました。

「小高区での帰宅後の生活を支援するITサービス」というテーマで、一度住民がすべて避難してしまった街に再び戻ってくるという特殊な状況の中で、現地の生活や住民間のコミュニケーションを便利にするためのWebサービスやアプリを開発しようと参加者が奮闘した2日間でした。

注1 <http://odaka.shosuriki.jp/>

注2 <http://www.u-aizu.ac.jp/research/uarc/oal/>

ちなみに、初日のお昼ごはんには地元の小高商業高校の皆さんが考えたお弁当「復興味わい弁当」が供されました。豚の生姜焼き、小松菜の煮びたしなど福島県産の食材が使われたものでした。2日目のお昼にはおにぎりとかニ汁が供され、カニ汁には相馬の試験操業で取れたカニと、相馬松川浦の海苔が使われていました。おいしいごはんは、ご当地ハッカソンの楽しみの1つです。

チームビルディング、そして開発スタート!

事前のアイデアソンにて課題抽出が行われており、会場には交通・インフラ、コミュニティ、地域の情報や観光などの課題について19ものアイデアの種が貼りだされていました。その中から興味のあるものの場所に集まることでチームビルディングが行われました。こういった課題解決のためのハッカソンでは実際の開発ができるエンジニアの比率が低いということもよくあるのですが、今回はエンジニアの参加も多く、バランスの良いチームビルディングになったと思います。

初日午後の時点では4つのチームができ、各チームごとに部屋に別れて開発が始まりました。まずはコンセプトを詰めて、場合によっては地元の方にヒアリングを行い、開発するものの内容を決めていき

Column ハッカソン参加のいきさつ

2016年の3月でHack For Japanの活動を始めてから5年が経ち、これまでの活動でさまざまなところでつながりができています。今回のハッカソンも2011年4月に会津大学でミーティングを開催したときのご縁、そして2014年2

月に行われたRace for Resilienceハッカソンの石巻会場(2014年9月号の本連載にてレポートを掲載)で知り合った森山貴士さんがその後南相馬に移住して活動されており、その森山さんが企画したイベントということもあって参加してきました。このようなつながりを広げ、継続していくこともHack For Japanの活動の1つだと考えております。

ます。

夕食後は引き続き開発を続けるチームや、お酒を飲みながら歓談する人たちなどさまざまな様子が見られました。会場が旅館だったため眠くなったら寝る場所があり、お風呂もあるというのは移動の手間がなく、また、運営にかかわった皆さんのきめ細やかな気配りのおかげもあって参加者は安心して開発に集中することができました。

成果発表

2日目の午後2時から行われた発表会は数多くの地元の皆さんも見守る中で行われました。

実質開発にけることができた時間は約24時間で、途中で合体したり、1日目の夜になってから発生したチームもあり、最終的に発表までこぎつけたチームは次の5つです。

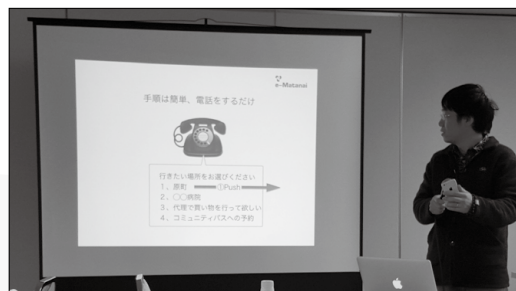
●e-またないタクシー

すでにある「e-まちタクシー^{※3}」をさらに良くして「待たない」タクシーにしようと考えたもので、高齢の方の出かけたい希望をかなえます。電話をかけると自動音声の応答にしたがって「行き先が原町なら1」というように電話のボタンを押すことで呼び出すことができます(写真1)。

ご近所の信頼基盤を元に隣近所で登録制にしてあり、登録した人のところに通知が行き、呼び出した人と通話をして確認してから行くことになります。有料だと白タクになってしまうのですが、あくまで

注3 <http://www.shokokai.or.jp/07/0756310003/index.htm>

◆写真1 電話の自動応答による呼び出しのデモ



知り合いの互助がテーマなので法律には抵触しません。本当の目的は車で地域をつなぐことで、世代間、ニーズ、地域的话题をつなぎ、コミュニケーションの交差点となることです。

●プロジェクトおだかびと

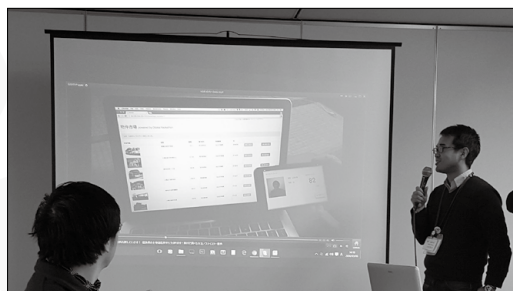
空き家問題の解決を目指したもので、貸す側には地域とのつながりが無い、すなわち信用のない人に貸すことへの不安、借りる側には不動産屋がない、市のサイトの空き家バンクでは情報が少ないという問題についての取り組みです。

おだかびとカードと名付けた住民カードで借り手の信用を担保し、貸し手の不安を解消します。カードにはおだかびとポイントが記録されており、ポイントはたとえば消防団に入ったり、地元のお店で買物をしたりすることで増えていくようにすることで、ポイントが高いと信頼できる人ということになります。この住民カードを使ってログインするとより多くの物件情報が得られるしくみを提供することができます(写真2)。

●シェア馬

南相馬には、相馬野馬追^{のまおい}のために馬がたくさん飼われています。その中には気軽に乗馬させてくれるような飼い主さんもいたり、G1レースに出場していたような名馬もいるのですが、知られていないためほとんどの人が関係ない出来事になっているという現状です。こうした馬の情報を公開したり、乗馬を予約したりすることで、町の活性化を狙うサービスとして考えられました(写真3)。馬情報シェアリングサービスで性別、血統、経歴、競争成績などを表

◆写真2 住民カードでのログインのデモ



示して乗馬予約のしくみを提供して、機会が少ない割に維持費が大きく、大きな費用がかかっているという問題を解決するものです。

●防犯ジョギングツール

南相馬市では「防犯ジョギング」という活動が始まっています。見回りを兼ねてジョギングするのですが、みんなが見回りしたところ、あまり行けていない場所などを可視化して、きめ細かいパトロールに役立てるしくみです。今回開発した範囲はジョギング時の位置情報を計測、表示するAndroidアプリとデータを保存するサーバサイドのAPIで、より多くの人が通ったメッシュは色を濃く表示することで可視化しています(図1)。

●チーム五十嵐 - Hack For Low

そのままではわかりづらい法律、条例の例文を身近に感じることができるしくみです(写真4)。

何かをやろうとしたときに、やって良いことなのか、許可がいることなのかかわからない……そんなときに判例をコンピュータに調べてもらったり、意見を提案できるものです。処理系にSWI-Prolog^{注4}を用いて実現しています。

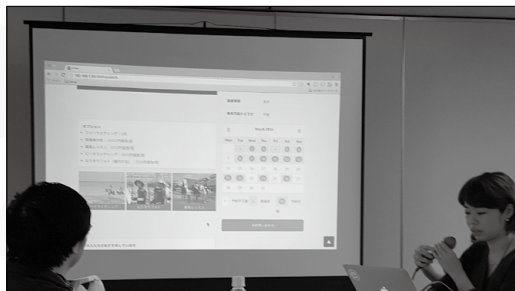


各賞と受賞チーム

今回のハッカソンでは、審査員を務めた小高ワーカーズベースの和田智行さんと加賀谷友典さん、そしてHack For Japanスタッフの及川の3名の名前を冠した賞と最優秀賞が用意されました。

注4 <http://www.swi-prolog.org/>

◆写真3 シェア馬の予約画面のデモ



各賞の受賞チームは次のようになりました。

●小高ワーカーズベース賞

この賞は、より生活に密着した近々に困っている課題に取り組んだチームに、ということで、「e-待たないタクシー」に送られました。賞品は小高ワーカーズベースで作っているガラスアクセサリでした。魅力的な仕事と楽しい職場を作ることで若者に戻ってきてほしいという、このガラスアクセサリ作りに賭ける思いとともに賞品が贈られました。

◆図1 メッシュ情報の色の違いによる可視化



●加賀谷賞

この賞は、タイトルの面白さもさることながら、実際のサービス内容がユニークで面白いということで、「チーム五十嵐」に贈られました。審査員の加賀谷さんは、難しい文章を読むのが苦手なところがあるというお母さんの話を例に出し、条文や規約などどっつきにくい文章をわかりやすく、簡単な問いで判定してくれるところを高く評価しました。

賞品は加賀谷さんがプロデュースしたnecomimiです。本誌の読者ならご存じの方も多いと思いますが、これは脳波で動作する猫耳の形状をした頭に装着するデバイスです。

●及川賞

この賞は、小高で実際に起きている課題を解決できることと他地域などへの発展性もあるということで、「プロジェクトおだかびと」に贈られました。

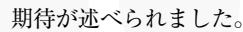
日本のどこの地方都市も人口減少が課題であり、他地域からへの移住者を誘致しているのですが、地元に住んでいる人とどのように融和していくかが課題となっています。まだよく知りもしない人に、たとえば自分の家を貸すことに対して抱く不安と、地域にどのように馴染んでいくかその方法がわからな

賞品は及川が過去に執筆や監訳などがかかわった書籍の中からメンバーそれぞれに選んでもらい、それを贈ることになりました。

最優秀賞は「シェア馬」に決定しました。

「南相馬と言えば野馬追」と言われるくらいに全国的にも知られている、野馬追のために飼われている馬の有効活用としてのアイデアが秀逸でした。馬好きにとっては野馬追に出ている馬に乗れるだけでも魅力的ですが、その中に過去にJRA所属の馬がおり、重賞レースでの入賞馬もいるということはかなりアピールできる点です。さらには、とくに昨今増えているインバウンドの外国人ツアー客はこのような日本の歴史を感じさせるものを好みます。このようにトータルで考えた場合の可能性は大きく、また実現可能性も高いということで最優秀賞に選ばれました。Webのシステムもすでに実績のある類似サービスを開発したメンバーがいたこともあり、完成度が高かったことも評価されました。

◆写真4 南相馬市の条例を例にしたしくみの解説



なお、最優秀賞の賞品としては、菜種油の石鹼、ホッキ飯のもと、地元の銘菓、福島県産の米「天のつぶ」5kgが送られました(写真5)。

最後に審査員を務めた及川と加賀谷さんから総評が寄せられました。

加賀谷さんは南相馬出身で今でも南相馬にご実家があります。小高駅前に来るのは1年半振りだったそうなのですが、当時と比べると格段に綺麗に明るくなったと復旧の進展を振り返りました。また、開催中に安倍首相が訪問したり、NHKでも特集を組まれているなど、小高に流れが来ているように感じると感想をお話されました。加賀谷さんは、ハッカソンと並行して地元高校生などとともに10年後を見据えた企画会議を開催していたのですが、この会議をさらに多くの地域の方や地域外の方と継続していきたいと抱負を語られました。SD